

4. 膵管内乳頭粘液性腫瘍の悪性予測因子の妥当性検証と適切な術式立案

獨協医科大学 埼玉医療センター 外科

野呂拓史, 立岡哲平, 高田武蔵, 石堂博敬,
千田貴志, 浦橋泰然, 三ツ井崇司, 竹下恵美子,
奥山 隆, 吉富秀幸

【目的】膵管内乳頭粘液性腫瘍の悪性予測因子である High risk stigmata (HRS) 因子, Worrisome feature (WF) 因子の妥当性を検証し, 適切な手術適応, 術式立案に役立つ条件を確立することを目的とした。

【方法】2005年から2020年までに当院で手術が施行された IPMN48例を対象とした。

年齢, 性別, 部位, 型, 腫瘍マーカー, 各 HRS 因子 (閉塞性黄疸, 造影される充実成分, 主膵管径 10 mm 以上), WF 因子 (嚢胞径 3 cm 以上, 肥厚もしくは造影される隔壁, 主膵管径 5-9 mm 等) について, 悪性化との関連性の検証と, 浸潤癌となるリスク因子を検索した。

【結果】症例の内訳は男性 27 名, 女性 21 名, 年齢中央値 70.5 才, 部位 (頭部 28/ 体尾部 20), 型 (主膵管型 4/ 分枝膵管型 11/ 混合型 23), 病理では腺腫 22 例, 癌 26 例 (invasive 14/noninvasive 12) であった。主膵管径中央値 7.3 mm, 造影される充実成分ありが 12 例 (32%), 嚢胞径中央値 30 mm, 造影される隔壁ありが 18 例 (47%) であった。

主膵管径, 造影される充実成分, 嚢胞径が, それぞれ有意な悪性を予測する因子であり, これら全てを満たすもの, 2つ, 1つのみの群が, それぞれ悪性である確立が主膵管型, 棍棒型の IPMN においては, 100%, 87%, 47% であった。

また, 浸潤癌の予測因子となるのは, 病変の数であり, この因子がある群では, 浸潤癌である確立が 80% であった。

【考察】HRS 因子, WF 因子は, これらを組み合わせるとことで, より正確に悪性所見, 浸潤癌であることを予測することが可能であった。

【結論】HRS 因子, WF 因子は, 組み合わせて評価することで, 耐術能の低い患者を対象に切除範囲とリンパ節郭清を控える指標となると考えられた。

5. Stage II 結腸癌における budding (簇出) の予後予測因子としての検討

獨協医科大学 埼玉医療センター 外科

齋藤一幸, 奥山 隆, 大井 悠, 野呂拓史,
吉富秀幸

【背景】簇出 (BD; budding) は固形癌における予後予測因子としての有用性が知られている。本研究は Stage II 結腸癌の臨床病理学的所見や術後再発・生存を調査し, BD の予後予測因子としての有用性を検討した。

【方法】2010年4月から2016年12月までに当科で手術を施行した stage II 結腸癌 213 例を対象とした。術前化学療法歴のある患者や多発あるいは重複癌, 炎症性腸疾患を有する患者は除外した。BD は癌先進部間質に浸潤性に存在する単個または 5 個未満の細胞からなる癌胞巣で, まず BD が多くみられる 10 領域を選択し, そのうち最も高頻度に見られる領域にて個数をカウントした (hotspot method)。BD は BD1: 0-4 個, BD2: 5-9 個, BD3: 10 個以上に分類し, BD1 を low-grade (LG) 群, BD2 および BD3 を high-grade (HG) 群とした。対象となる患者の診療録をもとに後方視的に調査し, 臨床病理学的所見と BD の関係や無再発生存 (RFS), 全生存期間 (OS) に関し多変量解析を行い検討した。

【結果】HG 群は (83 例, 38.3%) でリンパ管侵襲および脈管侵襲, 術後再発で, LG 群 (130 例, 61.7%) と比べ有意差を認めた ($p=0.025$, $p=0.044$, $p=0.001$)。RFS と OS については, HG 群は LG 群に比べ有意に短かった (5 年 RFS: LG 群 93.7% vs. HG 群 75.2%, $p=0.001$, 5 年 OS: LG 群 94.8% vs. HG 群 81.3%, $p=0.001$)。RFS と OS のリスク因子についての多変量解析では HG 群が, RFS と OS の両方において有意なリスク因子であった (RFS: $p=0.001$, OS: $p=0.002$)。

【結語】BD は Stage II 結腸癌患者の術後追加治療の判断基準や予後予測因子に有用な可能性がある。